

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ヨルゴス・セフェリス 《海洋冒険》号の旅人のために
Author(s)	茂木, 政敏
Citation	プロピレア , 30 : 109 - 121
Issue Date	2024-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055890
Right	Copyright (c) 2024 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



ヨルゴス・セフェリス

《海洋冒険》号の旅人のために 1

茂木 政敏 訳

外国人に現代ギリシヤ文学の話をするのは難しい。外国人はギリシヤをわかっていない。それも、部分的には知っているがゆえに、わかっていない。ギリシヤ文化 *Hellenisme* という遠大な伝統からすれば取るに足らない、些細な部分に秘められたいくつかの出来事については、外国人も学校で勉強した。自分が喋っている単語のいくつかはギリシヤ語起源だと教えられた。おそらく感動を込めて「古いにしえのギリシヤの栄光」が語られているのを、

耳にしたこともある。ギリシヤの「青い空」の下で生まれた神話から象徴を取り出し、それを用いた美しい文章を、劇で聞いたり、本で目にしたこともある。詩の最高峰はホメロスとエウリピデスで極められ、思想の最高峰はプラトンとアリストテレスによつて極められたと信じており、それら尊敬すべき名の下に、大胆過ぎる現代の作品を非難することもある。だが、それはギリシヤではない。

「流麗ハレキニツクナたる」島々と山々の国へ旅した人もいる。彼らは、オリンポスやデルフォイに行き、尊大になつたり、傷ついていたおのれの感性を高ぶらせた。廃墟となつた神殿に住まう神々に、我が身をさいなむ問題を問いかけた。だが、それはギリシヤではない。

さらには、多大な労苦と鋭い炯眼とをもつて、文献や石碑に打ち込んだ学究もいた。紀元前三世紀までの出来事に興味を持っていた人もいれば、紀元前三世紀から紀元後一世紀までの出来事に興味を持っていた人もいた。だが、それはギリシヤではない。

なぜなら、ギリシヤとは今も生きている現実なのだ。そして、生きとし生けるもの全てがそうであるように、ギリシヤという現実も神秘を秘めている。あの海、あの丘の間からかつて生まれ、精神的かつ肉体的血統によって現代まで脈々と続いている、途切れたことのない生の流れ。そのリズムを感じ取れない者、流れ全体を見てもそのリズムに現代的意味がある、*actuelle* と思えない者は、ギリシヤが何を意味しているか、絶対にわからないだろう。

そういう人たちは、こういう質問をする。「君たちは本当に、レオニダスやテミストクレス直系の子孫なのか？」

——いいえ。私たちは母の後裔であり、それ以外の何者でもありません。母はギリシヤ語で話し、ギリシヤ語で祈りました。聖金曜日になると、死者の神の行列を前にして、自らの魂が高ぶるのを感じました。私たちは、そんな彼女の後裔以外の何者でもありません。その細部がジェームズ・フレイザーの関心を引く人々に、私は帰するのです。そして、母のそのまた母は、ヴィヨンが唄った哀

れな女以上でも以下でもありません。

「では、今日、君たちの仲間に、ソフォクレスやフェイデアスはいるのか？」

——はい、います。今日、私たちのなかにソフォクレスのような人もいれば、フェイデアスのような人もいます。しかし、一つだけ違う点があり、失礼ながら、それゆえ貴方は質問の仕方を間違えているのです。貴方はこう考えるべきでした。そういう人は各々唯一無二の存在であって、自動車や馬車のように量産されるわけではありません。私たちは一人一人違うのです。アテネ人もスパルタ人も、私たちの仲間です。アレクサンドリア人、アンチオキア人、ビザンティン人も、私たちの仲間です。そして、クレタ島文学を作った人々や、暗黒の数世紀、奴隷となっていた名もなき人々は、ギリシヤ詩の精髓を生き生きとしたものにしつづけました。そもそも私だって、ウィリアム・シェイクスピアのような人物が後にも先にも現れていないから、今のイギリス人はもうイギリス人じゃないなどと思ったことはありません。

「でも、ギリシヤ語は死んだ言語ではないのか？」

——いいえ。現に私はそれを話し、それを書いています。ただし、ギリシャ語三千年の変遷は、他の言語の六、七百年の変遷よりも少ないと思えます。結局、ギリシャ語というのは守旧派なのです。最盛期を過ぎて、それを保っています。このポイントゆえに、難しい問題です。

私たちがよく耳にする質問をくどくど要約して申し訳なかつたが、これらのポイント一切を排除して、私たちの文学を語ることはできない。というのも、ギリシャ文学は中断したことなどただの一度もなく、大筋において、自らの信念を変えたこともない。そしてまたギリシャ文学は、自らの精髓に照らして消化吸収しうると思える外部からの影響作用を、拒もうとしたことも一度もない。ではここで、ギリシャ文学と英文学の関係について少し考えてみよう。

まず最初に、ギリシャで国民的英雄として尊敬されているバイロンがいる。しかし、彼の作品が私たちの文学に、目に見える痕跡を残したとは思えない。

独立後のギリシャ文学黎明期に、二人の大詩人

がその名をとどめている。ディオニシオス・ソロモス^①とアンドレアス・カルヴオス^②だ。二人とも、ミソロンギでのバイロンの気高い死に対し、一方は頌歌を、他方は悲歌を捧げている。しかし、ソロモスにせよ、カルヴオスにせよ、その作品にバイロンの重大な影響があったとは言えない。

ソロモスの幾つかの詩編、例えば『ランブロス』には、バイロンのロマンティスムの気風がしばしば指摘される。だが私が思うに、それだけだ。ソロモスの精神は、もっと別な風を送っている。彼が残した未完作品を読むと、彼の表現様式は残酷なばかりの格闘に左右されていたことに、目を奪われ、驚かされる。ある格闘に芸術家は崩壊し、作品は瓦礫のままになってしまった。ただし、この格闘や苦悶は、バイロンを優遇したギリシャ詩の状況とは全く関係はない。

長い間イギリスで暮らし、そこで亡くなったカルヴオスについては、バイロンに影響されたのが問題ではない。もっと目立たない別の影響をイギリスから受けていたのかが問題だ。これは専門的な研究が必要な、きわめて不分明な問題であり、

究明してみせた者はいない。とはいえ、カルヴェオスの個性も非常に独特だ。彼の作品について影響関係を語るのは、必然的に困難と思える。彼は空前絶後の言語において二十の頌歌を書き、それを海に小瓶を投げるかのように、無関心の夜に投じた。彼が亡くなったのは、最後の小冊子を出してから四十年後のことだ。彼は、それ以上一言も書くことが出来ず、自分の作品について何も言うことが出来なかった。

この誇り高い詩を闇夜から取り出す榮譽に浴したのはコステイス・パラマス^③だ。雰囲気からしてザギントス島の対極にある人物、その驚くべき知識からして、ヨーロッパ文学にとって予想外の人物、パラマスだ。パラマスならどんな本でも読んでいたような気がする。彼がハーディーの女主人公『テス』について詩を書いていたことを知り、驚いたこともあるだろう。しかし、パラマスに、あるいはパラマス時代のギリシャ文学に、外国文学がどう影響していたのか調べてみると、支配的地位にあったのはフランス文学であり、私たちギリシャの作家たちはフランス経由での英語圏作家

に興味をもっていったと断言せざるを得ない。

だから、E・A・ポオやオズカー・ワイルドが、ある時期アテネの文人の間で驚くほど読まれ、翻訳され、議論されていた。

ここで、話を明瞭にするため、さらに三つのポイントを指摘したい。

(1) 一九一四年戦争直前まで、マイナーな何人かの作家には、ラファエロ前派的なぼんやりとした光の、これまたぼんやりとした反映が見られる。

(2) 十九世紀全体を通じて、シェイクスピアの作品がギリシャで絶えず翻訳され、上演された。近代以降のギリシャ語変遷史を研究する人は、現在まで延々と積み上げられたこれら翻訳を比較、研究すると、とても面白いだろう。だが、前世紀初頭フランスにあったようなシェイクスピアの影響作用^④を、ギリシャについて指摘することはできない。これには二つの理由がある。一つは、例えばE・A・ポオの詩を訳したマラルメはその散文

がフランス文学に痕跡をとどめているが、マラルメほどの力量をもった翻訳者がギリシヤにはいなかったこと。もう一つの理由は、その個性的創造からしてシェイクスピアを引き合いに出すほど魅力的な作家が、その時代のギリシヤにいなかったことだ。例えばフランスでは、ラシーヌ復活を語ることが出来た。現代作家（マラルメ、ヴァレリー、ジッドなど）も、十七世紀のこの大詩人が切り開いた道を引き継いでおり、そういう血縁関係が存在しているからだ。同じことがイギリスについても言える。エリザベス朝の作家たちは、新時代の詩人たちによって、大衆に近いものにされた。ギリシヤにおいてははどうだったろう。カヴァフィス^⑤の徹底的な作品が現れて以降、ようやく、ある階層で『パラティナ詩華集』が非常に親しまれるようになった。だが、シェイクスピアに関してこうしたことは起こらなかった。ギリシヤにおいて彼は、劇でおなじみの作家、（括弧つきでの）《詩の天才》にとどまっていた。

(3) 三つ目のポイントはきわめて重要だ。なぜ

なら、E・M・フォースター言うところの「出生はギリシヤ人、精神はアレクサンドリア人である大詩人」、C・P・カヴァフィス Kavafis² が問題になっているからだ。ただしここで関わってくるのは、大詩人ということとは別な細部である。カヴァフィスは英語を習熟していた。ギリシヤ語と同じくらい熟知していた。伝記によると、幼少時代の彼は英語しか喋れなかったらしい。まあ、こんな特異な細部を知らなくても、彼の作品——とりわけ初期詩編——を読むと、その声法には「ベイズウォーターのギリシヤ語」の発音法が刻まれている感じがする。また、彼はきわめて勉強家で博識家だった。しかしながら、彼の作品にはギリシヤの影響作用しかない。ことによると、詩行の構成法や区切り方にイギリスの影響が判別できるかも知れないが、それだけだ。作品の価値において、カヴァフィスはギリシヤ文学最重要の詩人だが、同時に、以下の点もはっきりしている。彼は、アレクサンドリアの祖先たちへ長きにわたる持続的な熱狂を示し、だからこそ祖先たちと無媒介に合流できた。そう、この知識溢れるこの老人は、精

神からしてアレクサンドリア人であり——他のことには目もくれなかつた。

ギリシヤにとつて第一次世界大戦が終結したのは、一九二三年だ。直後から続いた微睡^{まどろ}みも終わった一九二六年頃から、新興文学がアテネで起こりはじめた。それは、危機の只中、やっとの思いで表面化した文学であり、既成の価値にとらわれない文学だった。不遇の憂き目にあっている先人たちが闇から引き出す文学であり、全てを問わないおす文学だった。

この文学については二つの主題を見てとれる。一つは社会的主題、もう一つは精神的主題だ。

この社会的主題というのは、ギリシヤ文化で唯一無二の事件に端を発している。一九二三年までの長い長い間、ギリシヤ人は世界中を駆け回り、旅をし、移住し、植民地を作った。私たちが地理的にギリシヤと呼んでいる国は出発地以外のなんでもない。帰還が難しかったり遅れがちになつている母港にほかならず、郷愁の対象でしかなかつた。オデュッセウスの物語は、ギリシヤが存在す

るかぎり語り継がれていくことだろう。ところが、一九二三年頃、分散していたギリシヤ系社会の住民大部分が追放され、ギリシヤ国境内に定住しにやつて来た。百五十万もの人々だ。ギリシヤ民族のこんな人口集中は、歴史上前代未聞だ。たんに統計上、前代未聞なのではない。人道的見地からしても、前代未聞の事態だ。

先に私が言った新興ギリシヤ文学は、「自由ギリシヤ」と私たちが呼ぶ国の人だけで作られたのではない。その若々しい感性を表現する術を求めて、アテネにやつて来た様々な若者たちによつて作られた。彼らの大部分は、渡り鳥のような人々であり、船乗りであり、エーゲ海の人たちだった。

私の青春時代だったこの頃を思い出すと、フォティス・コンドグル^⑥が自分の雑誌につけた名前が、私にとつて大きな意味を持っていた。その名は『フリキ・エテリア』、つまり「友愛会」だ。これは一八二二年の革命を準備した秘密結社の名前であり、世界各地に幅広く分散しているギリシヤ人に見れば胸を刺すような名前だ。たしか間違ひなければ、才能豊かな散文作家で、素描家かつ画

家であったコンドグルは、この雑誌でR・L・ステイブンスンの『宝島』を訳し、自分で描いた挿絵をつけて発表していた。

もはや旅をしなくなった人たちは皆、アテネ中心地への旅に移り変えた。そして、旅行中にイギリス人に出くわすように、その頃になって私たちは英文学を発見したように思える。

精神的主題というのは（それはある意味、先ほど私が書いた社会的状況と結びついているが）、新興ギリシャ文学はまず、先人たちの遺産調査と自らの内面探究の文学として出発したということだ。大変動をよりどころにしているのだから、これは当然のことだ。

こんなことを書きながら、私は立ち止まらなければならぬような気がしてきた。私は、本もノートもなく、記憶のみを頼りにこの文章を書いている。書物、会話、様相を、私はできるだけ正確に思い出そうと努めている。友人たち——彼らの公刊された作品は今日まだ見ることが出来ないが、彼らは感じ、思考している——彼らの主張、価値観、信念を、私はできるだけ正確に思い出そう

と努めている。国々での大殺戮という途方もない大罪によって灰塵に押しやられた、十才やそれ未満の幼子の命のことを、私は一つ一つ見回そうと努めている。そのうえで私が思うに、あれほど短い年月ではどんな世代であれ、自分たちを整理し、何者なのか示せる作品を産むことなど不可能だった。破壊の嵐を抑えるために血が流されているその時に、精神について語ることは難しい。確かにそうだ。しかし、別な観点から少し考えてみよう。それは、我々同士が戦っている理由とまさしく関連しているに違いない人間の価値という観点だ。この観点から考えると、こう断言せざるを得ない。ヨーロッパ激変の最も悲惨な結末によって、ギリシャ最良の精神的飛躍がぶち壊された。

そんなわけで、以下に続く文章には、個人的告白の口調を用いた方がいいと思う。国全体が恐るべき武器を旗印に、重々しい闇夜の背後に隠れたその時に、どうにか芽吹いたあの文学的生命について細部まで正確に語ることは、実際には不可能だ。御容赦願いたい。

さて、二つの面でのカタストロフの只中で成長

したこの世代は、先程書いたように、先人たちが譲り受けたものを明確化し、自分たちの世代を自覚しようとした。そして、この作業をまずギリシャの伝統に適用した。例えば、オスマン・トルコ支配下のギリシャ民衆の生活および作品に関する研究に、多大な関心が払われ、増大したのは、まさにこの時期だ。さらに私たちの世代は、マクリヤニスの『回想録』^⑦や画家テオフィロス^⑧の絵などの——歴史学やフオークロアのみならず、純粹に芸術的な——作品がもつ重要性を浮き彫りにした。だが同時に、この世代は外国文学に対する興味にとりわけ活気づいていた。彼らの先人たちは特にフランス文学を紹介したわけだが、この世代は英文学を発見、驚愕し、徐々に親近感を感じていった。

英文学に対するこの親近感は、二つの要因で成り立っている。第一の要因は、イギリスで何がおこなわれているのか、英文学作品の何が私たちの文学にとって最良の情報たり得るか、ということへの関心だ。随分昔のことだが、こんなことを思いつく。ギリシャ詩の英訳アンソロジーを出版し

た二人の友人がいたが、彼らとオデオン街を歩いていた。『ユリシーズ』初版の大きな青い本と一緒に、度の強そうな眼鏡をかけたジェイムズ・ジョイスの肖像写真が、ギリシャ国旗に縁どられ、シルヴィア・ビーチの店の陳列棚に飾られていた^⑨。それを見ていた友人の一人がこう言った。『この男は、マケドニア戦線で戦った奴に違いない』。というのは、この高名なアイルランドの作家について、当時、私たちは何一つ知らなかった。この学業時代、私たちはイエイツを発見したばかりで、夜のパリの街で彼の詩を大絶唱していた。

ずっと後のことだが、ファリロの海辺で長々と話をしていた友人が、こう話を結んだのを思い出す。「いいか。英文学の作家はいつも旅をしている。縦横無尽に旅をしている。やれやれ。ぼくらも旅をしなければならぬ。彼らを知らなければならぬのだから」。彼は、私たちが出版しようとした新しい雑誌を、『オデュッセイア』という名前にしようとした。なぜなら、私たちの人生の大事な部分は、オデュッセウスの名の下に展開していたのだから。それから、モンテーニュ以降は英国的ジ

ヤンルになった「エッセー」、イギリス小説のポリ
フォニー、私たちの新しい雑誌で訳したT・S・
エリオット、D・H・ロレンス、W・H・オーデン
の詩、『寺院の殺人』以後生まれた演劇の新しい伝
統、それらについて私たちは際限なく延々と議論
したことを思い出す。また、バフチン^⑩の『環』と
いう小さな雑誌を、私たちがどれほど喜び歓迎し
たか、思い出す。この雑誌はロンドンで発行され
たが、もはや過去のギリシヤではなく、現代ギリ
シヤから出発し、いわばギリシヤの全体像を論じ
ようとした雑誌だ。そうして遂には、私たちが英
文学の会報を出そうとした。時代は悲劇的だった
が、私たちは苛々して、待ち切れなかったのだ。
その表紙はハジキリアコス・ギカスの絵が飾り、
R・D・スミス、R・L・R・エドワード、バーナ
ード・スペンサー、ロレンス・ダレル、ロバート・
リデルの力添えで、発刊される予定だった。しか
しこの会報については、アテネが機甲師団に占領
される二週間ほど前に刷り上がったゲラ刷りしか、
私は目にするのが出来なかった。いつの日か未
来の歴史家が、あのころ私が作った雑誌よりマシ

な、『新文芸』、『現代ギリシヤ文芸』といった雑誌
を少なくとも走り読みして、こうした我々の営為
をわかってくれることを祈る。

さて第二の要因だが、それは、ギリシヤを第二
の故郷と愛しているイギリスの知的な若者たちが、
私たちの故国へ向けている関心であり、私たちの
していることに向けている関心だ。これは、新手
のバイロン主義になることもあるだろう。私は例
えば、詩人ロレンス・ダレルのことを考える。彼
は、ケルキラの町から数キロの所にある、数々の
驚異に満ちた古い家に引っ越してきたが、ケルキ
ラ島はプロスペロー^⑪の島だと公言していた。ま
た私は、小説家ロバート・リデルについても考え
る。彼はギリシヤ語を熟知し、直接ギリシヤ語で
ものを書ける。先の戦争直前に彼は、イギリスの
出版社のために友人の小説を英訳した。バーナ
ード・スペンサーについても考えるし、他の多くの
人々のことを考える。

こうした若者たちは皆、ギリシヤに霊神を探し
に行っただのではない。彼らは人間と出会うことに
満足し、その友となった。私たちの精神生活の間

題が、彼らにとっても、私たちと同じくらい重要な意味をもっていたこともある。そして私たちは彼らに、その文学によって導いてくれるように求めた。

ある夜、イドラ島の古い家で、私たちが作家たることの困難さについて、延々と議論していた。アメリカの作家ヘンリー・ミラーも同席していた。彼はずっと黙っていたが、やおら立ち上がると、こう言った。「私から君たちに言うことは一つだけだ。君たちが歩むべき道は一つしかない。ギリシヤに惚れ込むことだ」。

さて、我々のイギリスの友人たちのうちで最良の人たちはその行為と方法によって、このヘンリー・ミラーの言葉を各人各様にずっと言い直していたように思える。それはまかり間違っても、私たちが排他主義や自己中心主義に駆り立てるものではない。それどころか、私たちが圧倒している病をしばし癒し、私たちの希望を活性化させてくれる。

彼らは、トーマス・ゲイト卿でもジョージ・ソマーズ卿^⑩でもない。けれども、イギリスの筋金入

りの作家には、いつもプロスペローがいるような気がする。彼らはある朝、《海洋冒険》号に乗って、ギリシヤへ接岸した。彼らが、今日キャリバン一人が独裁しているあの土地の友人になっているとすれば、それはおそらく、そこで出会ったギリシヤの人々も、本心からプロスペローを欲し、《海洋冒険》号にいまだ果たせぬ憧れをもっているからだ。

プレトリア（トランス・ヴァール）

一九四一年一〇月二三日^⑪

【原註】

1 《『テンペストの』はるかに、そして最も興味深い発想源は、九隻の派遣隊による冒険を描いた様々なパンフレットである。この派遣隊は一六〇九年、ヴァージニアの新植民地に向けて出航した。そして、派遣隊のリーダー、トーマス・ゲイト卿とジョージ・ソマーズ卿を乗せた旗艦「海洋冒険」号は、バミューダ諸島で難破してしまった。》（『新・シェイクスピア・テンプル』編集者註）

2 アレクサンドリアで出版されたティモス・マラノスの詳細な著作を参照。カヴァフィスは、フランス語でCavafyと表記するが、私は諸々のギリシャ固有名詞について音声的書き替えを選ぶ。

【訳註】

① デイオニシオス・ソロモス 近代ギリシャの最初の代表的な詩人（一七九八—一八五七）。ザキントス島の生まれ。民衆語を用いたロマンティックな詩を書いた。バイロンについて、『バイロン卿の死に捧げる抒情詩』を書いた。

② アンドレアス・カルヴォス ピンダロスの頌詩を書いたギリシャ人の詩人（一七九二—一八六九）。ソロモスと同じくザキントス島生まれ。詩集は『リラ』と『新頌詩』の二冊しか発表しなかった。『新頌詩』第一頌歌「英国のムーサ」は、バイロンを歌っている。

③ コステイス・パラマス ギリシャの国民的詩人（一八五九—一九四三）。三浦正道訳『オリーブの木——パラマス詩抄——』（舷燈社）参照。ここで指しているのは、パラマスが書いた批評「ザキントス島の人、カルヴォス」（一八八八）が、無名だったカルヴォス詩の再発見につながったこと。

④ フランスでのシェイクスピアへの本格的な関心は、十九世紀前半に生まれ、そうした初期受容の成功例として、一八三〇年のスタンダールの評論『ラシースとシェイクスピア』、一八三四年発表のミュッセの戯曲『ロレンザッチョ』を挙げられる。渡辺一夫『曲説フランス文学史』（岩波現代文庫）第X章「ある情熱の記録」参照。

⑤ コンスタンティノス・カヴァフィス ギリシャ最大の詩人（一八六三—一九三三）。幼少をリバプールなどで暮らしたのち、生涯のほとんどもアレクサンドリアで過ごし、多くの歴史詩を書いた。中井久夫訳『カヴァフィス

全詩集』(みすず書房)、池澤夏樹訳『カヴァフィス詩集』(岩波文庫) 参照。

⑥ フォティス・コントグル ギリシャの画家、作家(一八九一—一九六五)。緩やかな画風が特徴。

⑦ マクリヤニス『回想録』 ギリシャ独立戦争、その後の内紛に活躍したマクリヤニス将軍(一七九七—一八六四)の回想録。民衆語、それも独特な表記で書かれ、民衆語文学成立に影響を与えた。セフェリスはマクリヤニス「回想録」をたいへん高く評価していた。志田信男「セフェリスとマクリヤニス」『セフェリス詩集』(土曜美術社)参照。

⑧ テオフィロス・ハジミハイル(一八七三—一九三四)ギリシャの放浪画家。二〇〇一年八月二六日付朝日新聞日曜版に、浜吉正純氏による紹介記事があるので、引用する。「テオフィロスは十九世紀末から二十世紀前半にかけて、一杯のワインと一切れのパンのために、ギリシヤとトルコの各地を渡り歩き、民家、パン屋、肉屋などの壁に絵を描き続けた」。「不思議な壁画だった。へ…自然と心がなごみ、いつまでもながめていられるような気がした。絵画の素養がない私にはうまく表現できないが、子供が描いたようであり、よく見ると子供には絶対に描けない、そんな絵だった」。

⑨ ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』は一九二三

年にパリのオデオン街にあったシルビア・ビーチの書店「シェイクスピア書房」から出版された。

⑩ バフチン 高名な文芸理論家ミハイル・バフチンの兄で、バーミンガム大学などで西洋古典学を講じていたニコライ・バフチン(一八八四—一九五〇)。

⑪ 以下末尾までの文章は、シェイクスピアの戯曲『テンペスト』と、その発想源たるバミューダ遭難事件になぞらえていた箇所がある。プロスペローは、『テンペスト』で、一行が流れ着いた幻想的な島の主。

⑫ トーマス・ゲイト卿、ジョージ・ソマーズ卿、および『海洋冒険』号は原註1 参照。キャリバンは、『テンペスト』に出てくる野蛮な下僕だが、「一人が独裁している」というのは枢軸国のギリシヤ占領に対する非難だろう。

⑬ ギリシヤがイタリアの最後通牒を拒否し、第二次大戦に巻き込まれた、いわゆるオヒ・デーからちようど一年後の日。敗れたギリシヤ政府は南アフリカに亡命し、外務閣僚だったセフェリスもそれにしたがっていた。

【訳者あとがき】『『海洋冒険』号の旅人のために』原文、フランス語。翻訳は『ドキメス』第三巻によった。同書所収のストラテイス・パスハリスによるギリシヤ語訳も参照した。

Γιώργος Σεφέρης, *Pour les voyageurs du «Sea-Adventure»*,
Δοκίμης, τόμος Γ', *Τκάρος*, 1992, σσ.56-69.

ギリシヤが第二次大戦に巻き込まれてちょうど一年後、南アフリカに亡命していたセフェリスが、アレクサンドリアのフランス語新聞『エジプト週報』*La Semaine égyptienne* の求めに応じて書いた評論。ギリシヤにおける英文学受容がテーマだが、三十年代世代誕生の背景を知る好評論だと思う。かつて『エーゲ海学会誌』十七号（二〇〇三年）に、セフェリス『詩に関する対話』抄訳と併載された旧稿を再び取り上げた理由も、そこにある。旧稿での訳註は半分近く削った。旧稿掲載時、白石隆治様とともに、有田忠郎先生、山口喜雄様へ特に名前を挙げて謝意を表した。後者お二人は鬼籍に入られたが、感謝の念は今も変わらない。